

藤原京六条大路の調査

—第188-16次

1 はじめに

本調査は、橿原市別所町の集会所建替にともなう事前調査としておこなった。

周辺では、本調査地の東方に位置する高所寺池の発掘調査（第113・124次調査）で六条大路の南北両側溝が検出されている。本調査区はその西延長部分に位置し、六条大路南側溝の検出が期待された。

調査区は、南北3m、東西2mで、調査面積は6m²、調査期間は2017年2月20日から24日までである。

2 検出遺構

基本層序 基本層序は以下の通りである。

地表面より、住宅建設にともなう造成土、黄褐色砂質土、黄褐色粘質土、灰褐色砂質土となり、遺構は黄褐色砂質土上面で検出した。地表面から遺構検出面までの深さは、約70cmである。

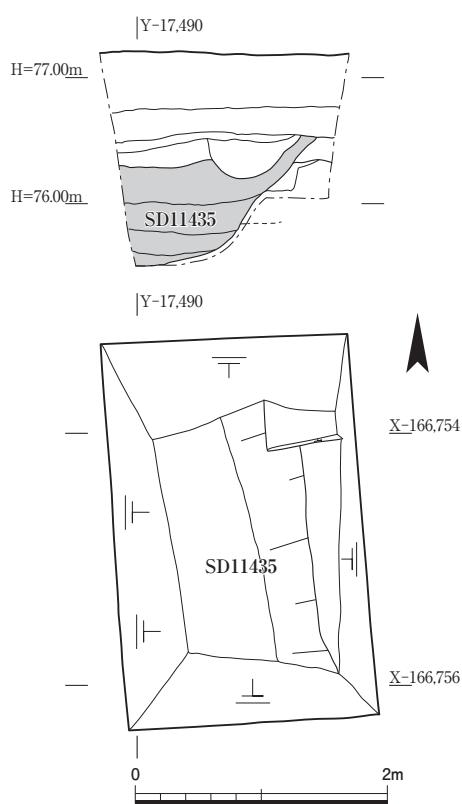


図109 第188-16次調査区遺構図・北壁土層図 1:60

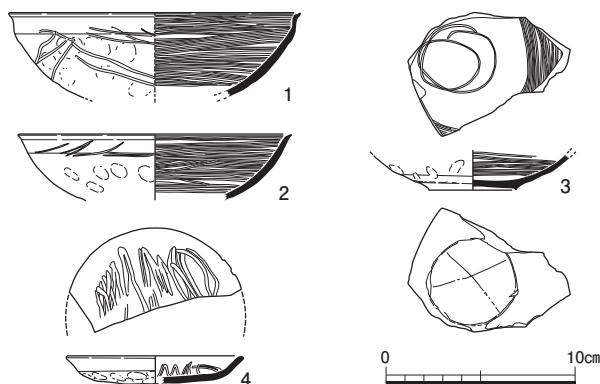


図110 SD11435出土土器 1:4

SD11435 調査区内の西4分の3で南北方向の素掘溝を検出した。遺構検出面からの深さは約1.1m、溝の西半分は調査区外であるが、断面形状より溝幅は2.6~2.8mと考えられる。埋土からは中世の瓦器片（図110）が出土した。埋土の最下層は粗砂層で、水が流れた際の堆積土とみられる。調査区が別所町集落の西端に位置することと、周辺が集落の中心に向かって高くなっていることをあわせると、この溝は中世に掘られた集落の環濠の可能性が考えられる。

そのほか、条坊側溝などの藤原京に関わる遺構は確認できなかった。

(大林 潤)

3 出土遺物

土 器 整理用木箱に1箱分、177点の土器・陶磁器が出土した。大半（155点）が中世環濠と考えられるSD11435からの出土で、内訳は土師器・弥生土器72点、須恵器26点、黒色土器3点、瓦器52点、白磁1点である。土師器・須恵器には飛鳥時代以前に遡るもの一定量含むが、瓦器椀（1~3）・皿（4）は概ね川越俊一の分類（「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」『文化財論叢』1983）による第Ⅱ段階B型式から第Ⅲ段階A型式の特徴を示しており、平安時代末期から鎌倉時代初期のものと考えられる。3の高台内には、「×」の焼成後線刻（針書き）がある。

(尾野善裕)

瓦 類 SD11435から、丸瓦が2点（50g）、平瓦が6点（880g）出土した。いずれも藤原宮の瓦である。

(石田由紀子)

4 まとめ

今回の調査では、中世の別所町集落の環濠とみられる南北溝SD11435を検出した。同様の遺構はこれまで確認されておらず、今後も当地区の環濠に関する新資料の発見が期待される。

(大林)